



自分で決められる子どもになる

浜中町立茶内小学校長 富田直樹

ちょうど1ヶ月ほど前、「成人式」の話題が新聞やニュースに取り上げられていました。昨年4月1日に、成人年齢が20歳から18歳に引き下げられて初めての「成人の日」であったため、各自治体で様々な工夫をしてこの日を迎えていました。式典の参加対象を20歳の人たちにして、「二十歳のつどい」などの名称で式典を行っていた自治体もありました。

さて、成人式の対象を何歳にするのかという話題は置いておいて、全国同様、本校の子どもたちも、18歳で高等学校等を卒業すると、成年となり主権者になります。つまり、子どもたちには、これからの社会を生き抜いていくために、急激な変化に柔軟に対応して自分で判断し意志決定でき、他者ととともに協働し、新たな価値や知識を生み出すような資質・能力を身に付けることが求められているのです。この資質・能力のことを、OECD（経済協力開発機構）は「Education 2030 プロジェクト」において、端的に示しています。それは、「Agency（主体性）」、「Co-Agency（共同主体性）」です。

そして、学習院大学教授の秋田喜代美氏は、現在の子どもたちを取り巻く学校教育の現状と、今、そしてこれからの時代に求められる子どもたちの姿を次のように語っています。



秋田喜代美氏

人に言われたことに従順に従うことを、日本の学校教育の中でも素直であると評価する文化がありました。しかし、その文化はときには、教師や周りの大人の顔色をうかがう子どもを生んできました。教師にとっては都合のよい子どもかもしれないけど、子ども自らが試行錯誤することで、その子どもらしい独自のやり方を導くことよりも、子どもが自我や欲求を押し殺して意欲をなくすような風土を生む危険性ははらんでいました。

しかし、我が国の子どもたちに今、そしてこれからの時代に求められるのは、自己効力感、自信、自尊心を培うことであり、自分で学びの羅針盤をもって、その子どもらしいやり方でペースをもって道を切り拓いていく自己決定ができることです。

第4学年の自学ノートの取組を見ていると、自分が興味をもったもの（星座、草木、音楽、都道府県の特徴など）について、図鑑や事典、インターネットなどを活用して見事にまとめている子どもたちがいます。また、自分が苦手としている教科の学習を毎日、繰り返している子どもがいます。この子どもたちの姿から、自分で自分の最適な学び方を判断し調整できる自己調整学習が身に付いていることが分かります。また、児童会役員の子どもたちが、学校評価（児童アンケート）の結果を見て、自分たちが取り組んできた内容（挨拶運動、ありがとうの木など）についての課題を発見し、その原因を分析するとともに、次の対策を検討する姿が見られます。自分たちの取組のPDCAを回していることが分かります。

本校の子どもたちのこのような姿から、決して何も言うことができなかつたり、参画の意思がなかつたり、決められなかつたりする存在ではないことが分かります。私たち大人が、どのような機会を提供するかによって、子どもたちは自分で選び決められる参画主体となり、学びの花を咲かせて輝くことができます。その機会を提供する私たち大人側の主体的判断が、今問われているのではないのでしょうか。